News Letter

大阪大学全学教育推進機構
ニュースレター

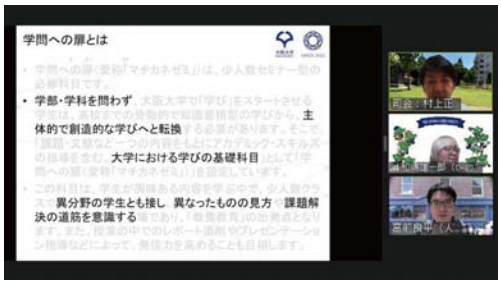
2021.4.1◆Vol.9

大阪大学 OSAKA UNIVERSITY
全学教育推進機構
Center for Education in Liberal Arts and Sciences

発行：大阪大学全学教育推進機構広報委員会
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16
E-mail：public-relations@celas.osaka-u.ac.jp

教員間の情報共有の取組み:「学問への扉」を例に

「『学問への扉』2020年度報告会・2021年度担当教員研修会」がオンラインで開催されました。事例紹介（12月24日にライブ配信）では、和嶋雄一郎准教授（高等教育・入試研究開発センター：「データのみかた」担当）と宮前良平助教（人間科学研究科：「エスノグラフィを書く」担当）に授業設計や遠隔授業の実施にあたって工夫した点などをお話しいただきました。グループワークでの適切な目標設定や学生に対する問いかけの方法など、分野を問わず参考になる実践が紹介されました。



事例紹介に加え、担当教員研修として「『学問への扉』の概要説明・アンケート結果の紹介」と「オンラインにおけるアクティブラーニングの方法」の動画２点をオンデマンドで配信しました。前者では希望登録やアンケートの結果など、学生の状況を把握する上で重要な情報を、後者ではオンライン授業でアクティブラーニングを行うための工夫やライブ型・オンデマンド型それぞれの利点と注意点を紹介しました。

今回の事例紹介には、学内の様々な部局から110名を超える参加者がありました。「学問への扉」の内容は担当教員の裁量に任されていますが、学生に対し主体的かつ創造的な学びへの転換を促すことを共通の目標として掲げています。様々な分野の教員が共通する目標を持って異分野の実践を聞き、情報を共有することには、総合大学の初年次教育ならではの面白さがあります。全学教育推進機構では、このほかにもFDセミナーなどを通して教職員間で情報共有を行う取り組みを進めています。皆様の積極的な参加をお待ちしています。

■ 共通教育の実施や「学問への扉」に関する情報 ▶▶▶ https://www.celas.osaka-u.ac.jp/teacher/
■ FDプログラムなど ▶▶▶ https://www.tlsc.osaka-u.ac.jp/fd_program/

宮前助教にご寄稿いただきました！

文集『パンデミックを歩く』
学問への扉「エスノグラフィを書く」の授業成果として

新型コロナウイルスが猛威を振るう中、ほとんどの授業がオンラインでの実施を強いられました。そんな中、私が開講している「学問への扉」を受けてくれている学生たちは、どんな思いで今を過ごしているのだろうか、そういうことも知らないままに授業を進めてもいいのだろうかと思い、一人ひとりに自粛生活の記録を書いてもらいました。

提出された生活記録（授業中ではオートエスノグラフィと呼んでいました）には、「対面かオンラインか」という議論の中にはなかなか出てこない、学生たちの声なき声がそこには綴られていました。そして自らの生活を書き記し、それを他の受講生に発表し、フィードバックをもらうという一連の過程自体が豊かな授業となっていきました。私のHP（http://ryoheimiyamae.com）から学生たちの生活記録を読むことができます。

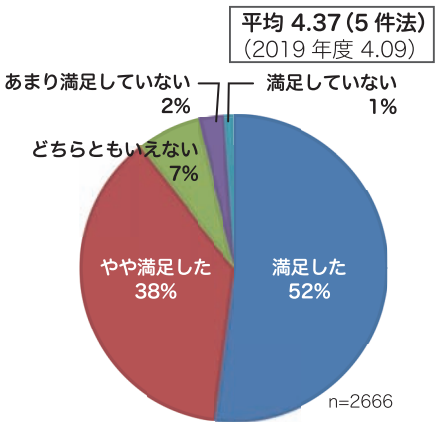
少人数型の授業だからこそ可能となった授業実践でした。学生たちに寄り添いながら展開していく授業のあり方について考えさせられた一年間でした。

（大阪大学大学院人間科学研究科・助教　宮前良平）

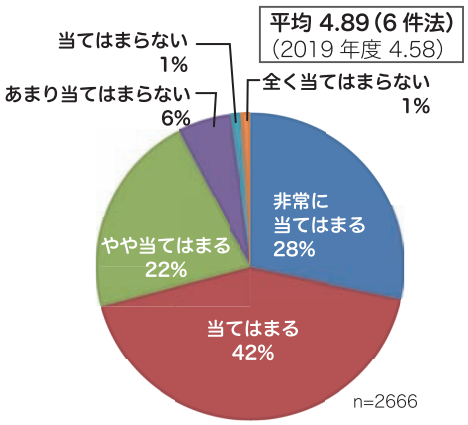
「学問への扉」 2020年度 アンケート結果

初年次教育科目「学問への扉」の２年目が終了しました。2020年度は248の授業が開講され、COVID-19の影響により、メディア授業での開講となりました。「学問への扉」の受講生を対象にアンケート調査を行い、対象者数3355名に対して、2666名（回答率 79.5%）の回答が得られました。「実際に今のクラスを受講して満足度はどのようなものですか？（５件法）」の質問では満足度平均4.37（2019年度 4.09）、本科目の目的である「研究の面白さを感じられた（６件法）」の質問については平均4.89（4.58）、授業方法に関する「教員は、学生の興味や関心を引き出すように試みていた（６件法）」という質問について、平均5.12（4.89）という結果になり、2019年度と比較して満足度が向上していました。メディア授業が実施される中、教員とのインタラクションや、いろいろな学部の学生と少人数で議論できたことが要因だと考えています。集計結果はWebで公開しております。

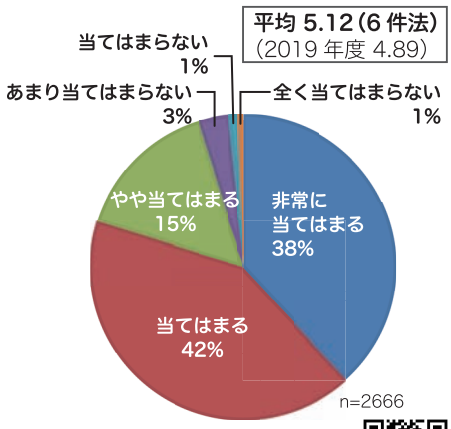
実際に今のクラスを受講して（当初の期待に対して）満足度はどのようなものですか？



研究の面白さを感じられた



教員は、学生の興味や関心を引き出すように試みていた



アンケートの集計結果はこちらから ▶▶▶
https://www.celas.osaka-u.ac.jp/teacher/

受講生に聞いてみた！ 横断型教育「副専攻・副プロ」とは

令和元年度から２年度にかけての大学院副専攻プログラム・大学院等高度副プログラムについて、受講生のインタビューをオンラインで実施しました。今回集まってもらったのは７名の大学院生（前期課程６名、後期課程１名）、専攻は理系から文系まで様々です。

まずそれぞれの受講動機を尋ねたところ、専門分野の研究をより深める目的で受講するケースと、少し異なる分野へ知識や経験の幅を広げようとするケースの両方がありました。学習の難易度は様々で、さほど負担はなかったという人がいる一方、他分野の教科書を一から読み込む努力をしたという人も。前提知識の異なる学生が集まるため、講義内容に難しさやもどかしさを感じることもあったようです。それでも、この副専攻・副プロで学んだ内容を、それぞれがその後の研究や就職活動に活用している様子が見て取れました。

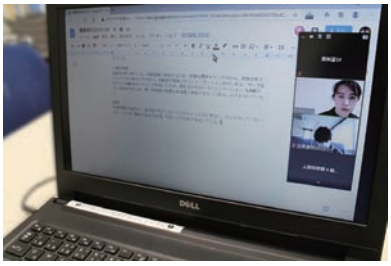
特に令和元年度の冬学期以降は、新型コロナウイルス対策として講義のオンライン化が一気に進みました。この点については意外に好評で、むしろ今後もオンライン開講を続けてほしいとの意見が多数を占めました。通学やキャンパス間移動の時間が節約できることや、アーカイブが残る講義は再学習しやすいことなどがメリットと受けとめられたようです。ただし、受講中の集中力や受講後のコミュニケーションなどの面で、対面授業の良さを再認識したとの声も聞かれました。

最後に後輩の受講者に伝えたいことを尋ねたところ、新たな知識や視点の獲得、他分野の学生や社会人と議論する機会、自主的に挑戦する経験などが、副専攻・副プロ受講のメリットとして挙げられていました。

横断型教育について　詳しくはこちら ▶▶▶
https://www.celas.osaka-u.ac.jp/students/senior/

イベント報告

2020年度第２回１年生クラス代表懇談会　オンラインで開催



2020年12月14日～17日の４日間、お昼休みに2020年度第２回１年生クラス代表懇談会を第１回と同じくオンラインで開催しました。3年間運営補助として携わってくれた金井明日香さん（法学部）に2020年度クラス代表懇談会の印象について語っていただきました。

私は学部２年生のときから３年間、クラス代表懇談会に携わってきた。その経験からすると今年のクラス代表懇談会は、学生にとっても教員にとっても例年にも増して重要な機会だったのではないだろうか。例年とは異なっていた２点を挙げつつ、今年度の懇談会を振り返ってみたい。

2019年度までであれば、新入生は大学生活のあらゆる面に関して、本当に様々な意見を持ち寄ってくれた。それらは高校生から大学生へと環境が大きく変化したことへの戸惑いと、大学に抱いていた期待とのギャップから生じていたと思う。そして同時に、新入生が大学生活を順調にスタートさせることができている証拠でもあった。しかし今年度は始めからすべて授業がオンラインになり、懇談会で出る意見は授業に関することと心身の不調を訴えるものが目立った。というよりも、それ以外のことは「経験していないからわからない」状態であった。また教員側にとっても、学生の生の声きくことができる絶好の場となった。教員も「初めてのことばかり」であるため、積極的に学生に意見を求めたり生活の様子を聞いたりしている姿が見られた。

「新しい大学のありかた」に関するヒントが得られたのも、今回の大きな特徴であった。例えば授業に関しては、オンラインと対面を同時並行で行うブレンド型の授業形式が良いという意見が多数出た。一つの授業で、各回ごとにどちらで出席するか選択できるのが便利なようである。また学生間や教員学生間のコミュニケーションが多い授業は対面が良く、教員が一方的に講義するだけの授業はオンラインが良い、という意見も散見された。新入生の生活にとっては、オンラインでの授業や交流があることが当然となっている。大学としては、感染症対策と大学の存在意義を両立させながら、学生の声も活かしつつコロナ後の大学のありかたを探っていくことが求められている。　（法学部　金井明日香）

CELAS NEWS

令和２年度大阪大学全学教育優秀賞表彰式を開催

2020年12月18日に全学教育推進機構セミナー室Bにて表彰式を開催し、受賞した50名の学生に進藤機構長から表彰状を授与しました。

全学教育推進機構の教員４名が令和２年度大阪大学賞を受賞しました

＜教育貢献部門＞

村上正行、安部有紀子、大山牧子「初年次教育科目『学問への扉』の授業及び効果分析とFD活動」

浦田　悠「ICTを活用した学習環境の整備と教育方法の支援」

Pickup!

教えて先生！

スポーツ・健康教育部門

島本 英樹 准教授

Q 下の図はおもな国における睡眠時間を比較しています（上段：女性、下段：男性）。「A」「B」「C」の中に入る国名の正しい組み合わせはどれでしょう？

1. A: アメリカ　B: ブラジル　C: 日本
2. A: イギリス　B: 日本　C: オーストラリア
3. A: 日本　B: ドイツ　C: アメリカ

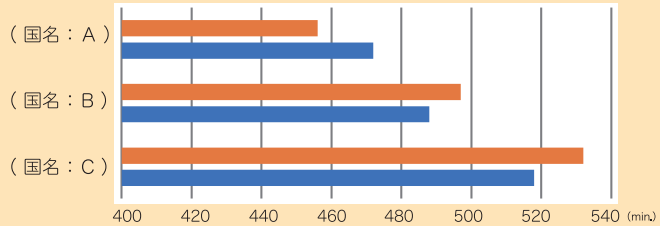


図. 睡眠時間の比較　（OECD, 2018）

解答＆詳しい説明はこちらから　▶▶▶　http://osku.jp/h0755

機構内にアクセスポイントを設置

2020年秋～冬学期、キャンパス内でメディア授業を受講できるよう、講義室とコモンズの一部にアクセスポイントを設置しました。COVID-19感染拡大防止には会話及び食事の際の対策が有効とされているので、対面授業専用・メディア授業用（食事不可）・メディア授業用（食事可）に区分けし、食事やメディア授業での発話のためパーティションを設置しました。充電スポットも用意し、一部の講義室は発話を伴うメディア授業用としました。

アクセスポイントについて困っている点がないかクラス代表懇談会で学生に尋ねたところ、周りに気を遣って発話しにくいなどの問題点が指摘されました。また、アクセスポイントの混雑についての指摘もありましたが、室数が不足しているのではなく、対面授業の後に集団で移動してしまうことが原因だという意見もありました。学生の意見を参考にしながら、安心して受講できる環境を整えるため運用体制の見直しや改善をすすめています。

みんなの太極拳

スポーツ・健康教育部門
陳昱龍 助教

太極拳は16世紀に明の武将が当時の武術をまとめたテキストを、17世紀に河南省の陳王延が発展させた「陳式太極拳」に始まると言われています（趙、2015）。その後、武術として発展し、1995年に中国でそれら伝統太極拳をもとに「簡化二十四式」が制定されました。今日でも、健康体操、スポーツとして、年齢や性別を問わず、世界中で楽しまれています。日本では70年代に中国から来日した教師により普及し、いまや愛好者は150万人ともいわれ、そのうち70%を女性が占めています（日本武術太極拳連盟 https://www.jwtf.or.jp）。

中国古来の陰陽説、経絡論（康、2002）を取り入れた太極拳は、武術攻防の動きと健康増進のための仕組みが融合したものなのです。武術といえば、ジェット・リーや少林寺などを連想し、「太極拳って難しそう…」と思っている人も多いかもしれませんね。実はとてもシンプルな動きで、その日の気分にあったポーズをチョイスすれば、気軽にリフレッシュできます。ウェアに着替える必要もないので、思い立った時、その場で気軽に取り組めます。運動はちょっと苦手、体力がないという人も安心して行えます（石水、2012）。

今回は太極拳のゆったりとした数多くの動作の中から、以下の三つの動きをご紹介します。体を上下左右に交互に伸ばしたり縮めたりすると、血行やリンパの流れが促進されて老廃物が排出されやすくなります。

POINT

肩を上げずに両腕を開く

肩が上がらないように両手をゆるやかに開きます。前に出した手は上向きに、後ろに引いた手は外へ向けましょう。（写真の決めポーズが一個増えそうですね）

1→2→3
左 右
各3回

1 両手を開き右足を後ろへ

両手を開き、右足を左足にクロスするように1歩後ろへ引きます。

2 足をクロスしたまま腰を落とす

両足をクロスし、両手を開いたまま腰を落とします。上体の姿勢を保ったまま、腰を真下に落としましょう。

3 左足を後ろへ腰を落とす

立ち上がり、両手を開いて、左足を右足にクロスするように1歩後ろへ引き、同じように腰を落としましょう。

デトックスを促す

下腹部や腰、足をストレッチして体の浄化力を高める。

EASY 腰は高めでもOK

深く腰を落とせなくても効果は得られます。足裏をしっかり床につけて、できる範囲内で腰を上下に動かしましょう。

編集後記

冬場の自粛生活で季節感がなくなってきました・・・。（K澤）

豊中の1月の最低気温1位タイを記録したこの冬、ヒゴロモソウが枯れました（K沢）

マスク無しで、早く息子とキャッチボールがしたいです。（Yパパ）

本紙と共に5年間、いよいよ飛び立つ日がやってきました。
みなさま、本当にありがとうございました。（バスリコ）

ニュースレターへのご意見･ご感想・ご要望はこちらまで
public-relations@celas.osaka-u.ac.jp